

旧約聖書の楽器ネベル： 琴か堅琴か

著者	佐々木 哲夫
雑誌名	東北学院大学宗教音楽研究所紀要
巻	11
ページ	6-12
発行年	2007-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1204/00000241/

旧約聖書の楽器ネベル — 琴か豎琴か —

佐々木 哲 夫

1 はじめに

ヘブル語のネベル (nēḥel נֶחֱל II) は、旧約聖書に 27 回記載されている。¹⁾ 新共同訳聖書は、この言葉を主に「琴」と訳出している。ただし、二箇所 (アモス 5:23、6:5) において「豎琴」と訳出している。27 回のネベルの用例のうち 23 回は、キンノール (kinnōr כִּנּוֹר 「豎琴」) と共に記載されているのだが、この「琴」という日本語は、中国から伝来した七弦琴、もしくは、日本の琴のような古楽器を連想させる言葉であり、他方、「豎琴」は小型のハープ、例えば、キタラやリラを連想させる言葉である。²⁾

さて、旧約聖書において、ネベルとキンノールが併記されているという事実は、この二つの楽器が異なる名称で呼ばれるにふさわしい相違を有していたからであり、他方、二つの楽器が同時に奏されているという事実は、それぞれ区別可能な音色を有していたことを想像させる。また、音色のみならず楽器の形状や構造も異なっていたと想像される。「十 [弦] のネベル」 (nēḥel 'āsōr עֶשְׂרֵי נֶחֱל 詩編 33:2) という表現より、ネベルが弦楽器であったことは十分想定されるが、しかし、琴であるのか豎琴なのかという疑問、即ち、楽器の素材や形状に関する疑問は、未だ解明されていない。³⁾ 本論文は、ネベルがどのような楽器であったかについて、旧約聖書におけるネベルの用例に注目しつつ考察しようと試みるものである。

2 ネベルの素材

邦訳聖書を参照すると、ソロモンが神殿と王宮を建築したとき、白檀がオフィルやレバノンから輸入されている (王上 10:11、歴下 2:7、9:10)。白檀は、そのときまで誰も見たことのない貴重な素材で、これを用いて床板や欄干が造作され、また、キンノールとネベルが製作されている (王上 10:12、歴下 9:11)。

列王記上 10 章 12 節

וַיַּעַשׂ הַמֶּלֶךְ אֶת-עֵצֵי הָאֲלֻמִּימִים מִסְעָד לְבֵית-יְהוָה
וּלְבֵית הַמֶּלֶךְ וְכִנּוֹרוֹת וְנִבְלִים לַשָּׁרִים
לֹא כָאֶבֶן עֵצֵי אֲלֻמִּימִים וְלֹא נִרְאָה עַד הַיּוֹם הַזֶּה

王はその白檀で主の神殿と王宮の欄干や、詠唱者のための豎琴や琴を作った。
 このように白檀がもたらされたことはなく、今日までだれもそのようなこと
 を見た者はなかった。(新共同訳)

歴代誌下 9 章 11 節

וַיַּעַשׂ הַמֶּלֶךְ אֶת-עֵצֵי הָאֲלֻמִּים מְסֻלּוֹת לְבֵית-יְהוָה
 וּלְבֵית הַמֶּלֶךְ וּכְנֹרוֹת וְנָבָלִים לְשָׁרִים
 וְלֹא-נִרְאָה כָהֶם לְפָנִים בְּאֶרֶץ יְהוּדָה

王はその白檀で神殿と王宮の床板や、詠唱者のための豎琴や琴を作った。
 かつてユダの地でだれもこのようなものを見たことはなかった。(新共同訳)

さて、列王記上 10 章 11 節と 12 節において「白檀」と訳出されている אֲלֻמִּים (ʾalmuggîm) は、当該個所にも記載されている単語であり、他方、歴代誌下 9 章 10 節と 11 節において「白檀」と訳出されている אֲלֻמִּים (ʾalgūmmîm) は、歴代誌下 2 章 7 節にも記載のある旧約聖書で合計 3 回出現している単語である。אֲלֻמִּים と אֲלֻמִּים は、ל (g) と מ (m) の転移による変異と推察されるので、同一語に起源する単語と考えられる。例えば、GKC は、אֵל (ʾl) をアラビア語の冠詞の発現と分析している。⁴ 確かに、アラビア語の gamīl には lush plant (「青々とした植物」) の意味があり、木材と関連している単語であると言える。

ヘブル語の אֲלֻמִּים は、伝統的に「白檀 (sandal-wood)」と理解されてきた。しかし、白檀はレバノンに自生する植物ではないとの指摘がある。⁵ 確かに、白檀は、東南アジア、インド、インドネシア、マレーに見られる植物で、レバノンに産するものではない。恐らく、レバノンやオフィルの貿易地に海路輸入されたものがエルサレムにもたらされたのだろう。⁶ いずれにせよ、עֵצֵי הָאֲלֻמִּים (ʿāšê, trees) によって連結語 (construct chain, "almug timbers") を構成しており、それゆえ、ネベルを木製の楽器であると推測することは妥当である。

では、ネベルの特別でない通常の材質とは何だったのだろうか。歴代誌上 16 章 5 節に כְּלֵי נָבָלִים (kālê nāḥālîm) との表現が見られる。

歴代誌上 16 章 5 節

אֶסְף הָרֹאשׁ וּמִשְׁנָהוּ זִכְרִיָּה וְעִיָּאֵל
 וְעִבְדוּ אֶת-יְהוָה בְּכָלֵי נָבָלִים וּבְכִנּוֹרוֹת וְאֶסְף בְּמִצְלָתַיִם מִשְׁמִיעַ

アサフを頭とし、次にゼカルヤ、更にエイエル、…… オベド・エドム、エイエルを立てた。彼らは琴と豎琴を奏で、アサフはシンバルを鳴らし、

כְּלֵי נְבָלִים 的連結語は、「ネベルの器具（楽器）」と直訳される。さてこの כְּלֵי (kālê) 「器具」と נְבָלִים (nəbālîm) [ネベルの複数形] の連結表現を、種類もしくは名前を示す用例と解するならば、その意味は「ネベルという名前の楽器」となる。また、材質を示す用例と解するならば「ネベルを材質にした楽器」となる。⁷⁾ 後者の解釈の場合、ネベルの他の意味である「皮」(נֶכֶל I, skin) との関連が指摘されてくる。⁸⁾ 対句のように頻繁に表記されている כְּנֹר に関し、כְּלֵי כְנֹרוֹת [כְּנֹר 是 複數形] という連結表現が旧約聖書に見出されないので、前者よりも後者の解釈の方が好ましいように思われるが、しかし、いずれにせよ、考古学的証拠もなく推定の域を脱することはない。

さて、ネベルやキンノールは、サムエル記下6章5節において、以下のとおり、「糸杉の楽器」（新共同訳）[עֲצֵי בְרוֹשִׁים (‘ăšê bərōšîm)、直訳は「糸杉の木、もしくは、もみの木材」、⁹⁾「楽器」は補記] と共に列記されている。

サムエル記下6章5節

וַיָּרֶד וְכָל-בֵּית יִשְׂרָאֵל מִשְׁחָקִים לִפְנֵי יְהוָה בְּכָל עֲצֵי בְרוֹשִׁים
וּבְכְנֹרוֹת וּבְנְבָלִים וּבְתַפִּים וּבְמִנְעִנָּעִים וּבְצִלְצְלִים

ダビデとイスラエルの家は皆、主の御前で、糸杉の楽器、
豎琴、琴、太鼓、鈴、シンバルを奏でた。

(新共同訳)

ネベルとキンノールは、特徴のある代表的な楽器だったので、עֲצֵי בְרוֹשִׁים という総括的な表現に含めなかったのかもしれない。しかし、当該本文について指摘しなければならない課題がある。関連箇所である歴代誌上13章8節の本文が、下記の通り異なって綴られていることである。

歴代誌上13章8節

וַיָּרֶד וְכָל-יִשְׂרָאֵל מִשְׁחָקִים לִפְנֵי הָאֱלֹהִים בְּכָל-עֹז וּבְשִׁירִים
וּבְכְנֹרוֹת וּבְנְבָלִים וּבְתַפִּים וּבְמִצְלָתִים וּבְחִצְצְרוֹת

ダビデとすべてのイスラエル人は、神の御前で力を込めて、歌をうたい、
豎琴、琴、太鼓、シンバル、ラッパを奏でた。

(新共同訳)

サムエル記下6章5節の綴りを誤記と想定し、⁹⁾ その翻訳に歴代誌上13章8節の本文を適用させる翻訳がある。サムエル記下6章5節を、「ダビデとイスラエルの全家は琴と立琴と手鼓と鈴とシンバルとをもって歌をうたい、力をきわめて、主の前に踊った」と口語訳聖書が訳出し、「ダビデとイスラエルの全家は歌を歌い、立琴、琴、タンバリン、カスタネット、シンバルを鳴らして、主の前で、力の限り喜び踊った」と新改訳聖書が訳出しているのは、その例である。サムエル記下6章5節をマソラの綴りのとおり「糸杉の木[の楽器]」と訳出することは不適切なのだろうか。

ところで、列王記や歴代誌において **עֲצֵי בְרוֹשִׁים** の記述は特別ではなく、他にも記載例が五箇所において見出される。¹⁰⁾ また、**אֱלֹהִים** (God) ではなく **יְהוָה** (the Lord) が記されていることから、サムエル記下6章5節の **עֲצֵי בְרוֹשִׁים** を誤記と判定するのは困難と考える。むしろ、本文に即してそのまま「糸杉の木[の楽器]」と翻訳することの方が妥当と考える。問題は、ネベルが「糸杉の木[の楽器]」とどのような関連性をもって記載されたかである。この問題はネベルが奏せられた目的とも関連しており、次節においてさらに考察を進める。

3 ネベルの演奏

楽器ネベルが他の楽器と併記されずに単独で記載されている用例は、詩編144編9節とイザヤ14章11節である。

詩編144編9節

אֱלֹהִים שִׁיר חֹדֶשׁ אֲשִׁירָה לָךְ
בְּנֶבֶל עֶשׂוּר אֲזַמְּרָה-לָךְ

神よ、あなたに向かって新しい歌をうたい
十弦の琴をもってほめ歌をうたいます。

(新共同訳)

イザヤ14章11節

הוֹרֵד שְׂאוֹל נְאוֹנָה הַמֵּיִת נְבִלִיָּה
תַּחֲתֶיהָ יֵצֵעַ רֶמָּה וּמִכִּסִּיָּה תוֹלְעָה

お前の高ぶりは、琴の響きと共に 陰府に落ちた。
蛆がお前の下に寝床となり 虫がお前を覆う。

(新共同訳)

前者は「十弦のネベル」という解説が付されており、後者は「高ぶり」(גָּאֹן ḡāʾôn) を暗示する象徴表現になっている。いずれも、通常のネベルの演奏状況を理解する手がかりを与えるものとなっていない。他方、ネベルの大部分の用例においては、例えば、詩編 71 編 22 節に見られるように、キンノールと対句的に併記されている。

詩編 71 編 22 節

גִּם־אֲנִי אֹדֶךָ בְּכִל־נֶבֶל אֲמַתְךָ אֱלֹהִי
אֲזַמְּרָה לְךָ בְּכִנּוֹר קְרוֹשׁ יִשְׂרָאֵל

わたしもまた、わたしの神よ。琴に合わせてあなたのまことに感謝をささげます。
イスラエルの聖なる方よ。わたしは豎琴に合わせてほめ歌をうたいます。

(新共同訳)

キンノールが単独の楽器として演奏されるのは、賛美の伴奏のためだけでなく(詩 98 : 5)、特別な目的のための場合がある。例えば、サウル王の心を穏やかにさせる効果を期待してダビデによって演奏されたり(サム上 16 : 23)、謎を解くための力として演奏される場合(詩 49 : 5)である。旧約聖書だけでなく、古代オリエント世界においてキンノールは、神格化され、神癒や祭儀において使用された楽器だった。例えば、ウガリトのパンテオン・リストに *knr* が登場している(KTU 1.118:31)。また、*knr* に神を表す限定詞のディンギル・サインが付され、犠牲が捧げられるのは、ウガリトに限らず、シュメールやバビロニアの資料にもでてくる。¹¹⁾しかし、何故、楽器の豎琴だけがこのように特別扱いされて、他の楽器を代表する立場を得たのかは明らかになっていない。心を和ませることによって病を癒すという効力が神的な力によるものと考えられたからであろうか。

豎琴に関するこのような特徴を勘案するならば、旧約聖書においてキンノールが主要な楽器として位置づけられていることは、首肯し得る記述なのである。即ち、キンノールが、ネベルではなく、笛(創 4 : 21)、太鼓(創 31 : 27、イザヤ 24 : 8、30 : 32)と組み合わせられたり、また、前節で考察していたサムエル記下 6 章 5 節では、契約の箱の移動に際し、人々は、糸杉の楽器、豎琴、琴、太鼓、鈴、シンバルも併せて奏しているのである。踊りや行進のために太鼓や笛やシンバルが付加されて奏され(ヨブ 21 : 12、30 : 31、詩 149 : 3)、その音楽に合わせるようにして、担がれて移動する契約の箱のまわりでにぎやかな踊りが行われたのである(サム下 6 : 15~16)。このような場面において「糸杉の楽器」も奏され、無論のこと、ネベル

も奏されたのである。キンノールが中心的楽器として用いられているのとは対照的に、ネベルは、太鼓やシンバルなどの打楽器が場の雰囲気を高揚させるために用いられたように、キンノールの演奏を補助する楽器として用いられたものと推察される。

さて、「十弦のネベル」（詩 33 : 2）というように、弦に関し特別な説明が付されているのは、恐らく、通常のネベルが十弦でなかったからであろう。「六弦の立琴」（**קִלְי־נָבֶל** 新改訳・詩 71 : 22、**נָבֶל** 詩 81 : 3、**נָבֶל** 詩 92 : 4）の翻訳もあるが、当該箇所のマソラ本文に六弦を示唆する表記は見当たらない。古代の竖琴として、五弦（前三千年期初期、参考文献図版番号 197）、七弦（前二千年期初期、図版番号 794, 795）、八弦（前二千年期中期、図版番号 847）、十二弦（前一千年期中期、図版番号 207）のものが報告されており、¹²⁾ 特に、七弦の楽器を垂直ではなく水平に保持して演奏する姿（図版番号 794）は印象的である。¹³⁾ また、他の考古学的図版には、同じ楽団の中に、竖琴を弾く者と一緒に、形状の異なる別種の竖琴を弾く者の姿も描かれている（図版番号 199, 202, 208, 797）。¹⁴⁾ さらに、ギターのようにリュートを弾く女性（図版番号 208）やツィターを弾く者の姿（図版番号 203）も描かれている。¹⁵⁾ リュートやツィターは弦楽器であるが、その構造は竖琴とかなり異なり、演奏の仕方も異なっていたことであろう。前節において考察した「糸杉の楽器」とは、これらの楽器のことであろうか。他方、竖琴と構造が酷似している弦楽器を水平に保持して演奏している者の姿は、竖琴弾きのそれとはかなり異なっている。恐らく、音色や演奏の仕方も異なっていたと推察される。

4 おわりに

これまでの考察より、ネベルを弦楽器と推定することは妥当なことであったと判断される。しかも、白檀と解釈されている植物を素材にしていることより、ネベルは、木製の楽器であると推定される。弦数は、必要とされる音程に応じ、複数種類存在し、特に、十弦のネベルは特筆すべき弦数の楽器だった。素材に、皮が利用されていたかは定かでない。竖琴と一緒に常用されていたことから、ネベルは、キンノールの演奏を補助する楽器だったと推察される。その形状や演奏の仕方がキンノールとかけ離れて異なっていたとは思われない。キンノールの形状だったのか、垂直ではなく水平に保持されて演奏されたのか、リュートやツィター程に異なっていたのか、旧約聖書の用例からはそのような課題に明確な答えを導くことは難しい。

しかし、キンノールを「竖琴」と訳出し、ネベルを「琴」と訳出する場合、日本語の「琴」が、横型の多弦楽器、例えば、七弦琴やツィターを連想させる言葉であることには留意する必要がある。また、ネベルを「立琴」と訳出するならば、楽器

を横に保持して奏する可能性を閉じてしまうことになり、必ずしも適切とは言えない。ネベルは、キンノールと区別しなければならない楽器であることは確かなのだが、適切で相応しい日本語が見出せない以上、**נֶבֶל** のそのままの発音を用いて「ネベル」と訳出することは妥当な可能性と考える。

注

- ① サム上 10 : 5、サム下 6 : 5、王上 10 : 12、イザ 5 : 12、14 : 11、アモ 5 : 23、6 : 5、詩 33 : 2、57 : 9、71 : 22、81 : 3、92 : 4、108 : 3、144 : 9、150 : 3、ネヘ 12 : 27、歴上 13 : 8、15 : 16、15 : 20、15 : 28、16 : 5、25 : 1、25 : 6、歴下 5 : 12、9 : 11、20 : 28、29 : 25。
- ② キタラとリラは明確に区別されているわけではない。例えば、キタラは、胴と支持柱が明瞭に分かれておらず、それら全体が中空の共鳴体となっている、いわゆる、天使のハーブを連想するもので、他方、リラは、支持柱が胴の上部に差し込まれた構造で、中空の胴のみが共鳴体になっている。
- ③ 金澤正剛『キリスト教音楽の歴史—初代教会から J. S. バッハまで—』（日本キリスト教団出版局、2001 年）13～14 頁。
- ④ *Gesenius' Hebrew Grammar*, ed. E. Kautzsch, rev. A. E. Cowley (Oxford: Clarendon Press, 1980), 112 (§§ 35m).
- ⑤ *The Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament* (Leiden: Brill, 1994), 1:57.
- ⑥ 大槻虎男『聖書の植物』（教文館、1974 年）218～219 頁。
- ⑦ C. H. J. van der Merwe, et al, *A Biblical Hebrew Reference Grammar* (Sheffield: Sheffield Academic Press, 1999), 198-99.
- ⑧ イザヤ 2 2 章 2 4 節の **כֶּלִי הַנְּבָלִים** (kalê hannəbālīm) は、「壺 (jar) 」と訳されているが、それは「皮製の壺 (skin-bottle) 」のことであると解される。
- ⑨ Roddy Braun, *I Chronicles*, Word Biblical Commentary, vol. 14 (Waco, Texas: Word Book, 1986), 173.
- ⑩ 王上 5 : 22、24、6 : 34、9 : 11、歴下 3 : 5。
- ⑪ 小坂橋又久『古代オリエントの音楽—ウガリトの音楽文化に関する一考察—』（リトン、1998 年）138～140 頁。
- ⑫ J. B. Pritchard, *The Ancient Near East in Pictures* (Princeton: Princeton University Press, 1969), 270～273, 375～380.
- ⑬ Ibid, 375.
- ⑭ Ibid, 63～65, 346.
- ⑮ Ibid, 63～65.